特別
シンポジウム

「低炭素社会へ ～世代を超える・つなぐ活動づくりのために～」

日時◆ 2013 年 2 月 17 日（日）13：00 ～ 15：00
会場◆ 東京ビッグサイト会議棟 7 階（国際会議場）

パネルディスカッション

コーディネーター：川北 秀人 氏
IIHOE［人と組織と地球のための国際研究所］代表

87 年に京都大学卒業後、（株）リクルートに入社。国際採用・広報・営業支援などを担当し、91 年に退職。その後、国際青年交流 NGO の日本代表や国会議員の政策担当秘書などを努め、94 年に IIHOE 設立。NPO や社会責任志向の企業マネジメント、NPO と行政との協働の基盤づくり、CSR や環境・社会コミュニケーションの推進を支援している。

パネリスト：湯谷 千鶴子 氏
香川大学直島地域活性化プロジェクト（香川大学 経済学部 2 年生）

香川大学直島地域活性化プロジェクトでは、2006 年 8 月から直島でカフェを経営。その中で、様々な環境対策に取り組み、経営と環境の両立を目指し活動中。また、直島で開催されている環境イベントにも参加し、環境と地域への貢献に取組んでいる。

パネリスト：東 大史 氏
株式会社エコブランド代表

1977年7月27日生まれ。課題先進地域である中山間地域での地域振興に可能性を感じ、先進地域として活発に活動していた岡山県美作市に 2010 年より移住、棚田再生を中心とした中山間地域農業の集落営農化や都市農村交流の企画、自然エネルギー導入など様々な案件の実用化に携わる。実際に現場発の事業企画を立案しながら、中山間地域をはじめとした日本のローカルに普遍的な課題解決モデルを提案することを目指している。

パネリスト：安井 レイコ 氏
エッセイスト＆料理研究家、NPO 法人みんなのエコイク推進協会理事長

料理研究家。「体に良い料理は、地球環境にも良い」をモットーとして、健康でエコな料理講習会や食育のイベントを全国で開催。トークショー、テレビ、CM、ブログなどでも活動中。

パネリスト：井田 徹治 氏
共同通信社 編集委員・論説委員（環境・開発エネルギー問題担当）

1959 年東京生まれ。東京大学文学部卒、共同通信社に入社。つくば通信部などを経て本社科学部記者。 2001 年から 2004 年まで、ワシントン支局特派員（科学担当）。現在、編集委員兼論説委員。環境と開発の問題を長く取材、気候変動枠組み条約締約国会議、環境・開発サミットなど多くの国際会議も取材している。著書に「グリーンエコノミー最前線」（岩波新書）他多数。

パネリスト：茅野 實 氏
元八十二銀行頭取、一般社団法人長野県環境保全協会会長
長野県地球温暖化防止活動推進センター長

1933 年生まれ。1998 年八十二銀行頭取在職中に「後世代のため限りある地球を守ろう」と長野県環境保全協会を設立し、活動を開始した。同協会は長野県知事と長野市長から地球温暖化防止活動推進センターの指定を受け、両センターのセンター長として率先して温暖化防止に取組んでいる。

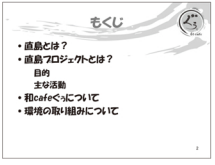
パネリスト報告

湯谷 千鶴子 氏

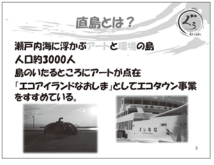
香川大学
直島地域活性化プロジェクト

1

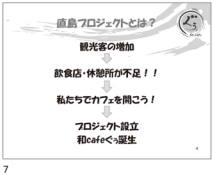
2



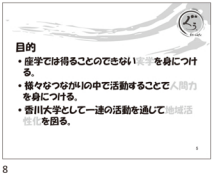
3



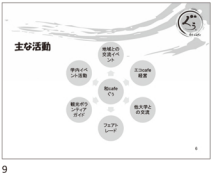
4



5



6



7

8

9

10

パネリスト報告

東 大史 氏

棚田再生

1

2

3

4

5

パネリスト報告

安井 レイコ 氏

うちエコ！ ごはん とは

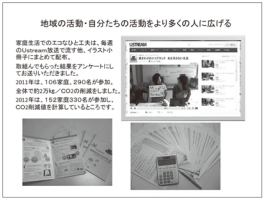
1

2

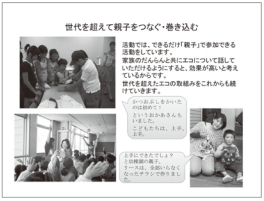
3

4

5



6



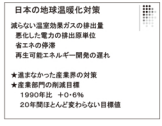
パネリスト報告

井田 徹治 氏

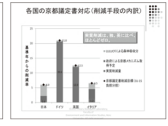
地球温暖化対策と市民社会

1

2

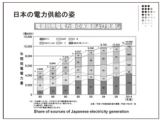


3

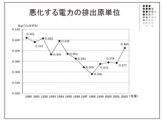


4

5

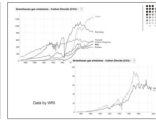


6

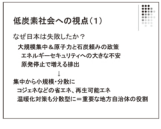


7

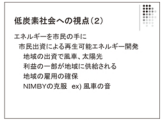
8



9

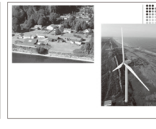


10



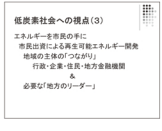
11

12



13

14



15

パネリスト報告

茅野 實 氏

未来に伝えよう　かけがいのない地球

1　長野県環境保全協会（センターの指定法人）の概要

・1998 年 11 月設立　主に会員の会費で運営
・県内主要企業約 350 社と他団体・個人約 500 団人が会員
・県内に 7 支部を持ち、各地域での環境保全活動の助成、表彰、普及広報、活動への参加（省エネ住宅等）
・長野県、長野市のセンター業務受託

2　長野県センター（長野市センター）の活動

・2001 年 5 月 県センター受託、2010 年 10 月 市センター受託
・信州省エネパトロール隊、地球温暖化防止活動推進員（うちエコ診断等）、県の信州エコポイント事業、国・県の補助・委託事業（コンソーシアム事業等）

3　自然エネルギー信州ネット

・新しい公共（県・市町村・企業・大学・NPO 等の連携 ⇒ 地域協議会）によるエネルギーの地産地消を目指す。
・太陽光・小水力・バイオマス等の発電、地熱・太陽熱等の活用に既存の水力発電を加えた低炭素エネルギーで、2050 年までに県内エネルギーの 100% 自給を目指す。
・2011 年 7 月に設立。現在までに約 20 の協議会（主に地域協議会）が立ちあがって、そのうち 2 ツで発電が始まった。
自然エネルギー信州ネットの役割は、地域協議会の立ち上げ、共通課題の解決、資金調達（基金設立等）などの研究・支援

人類（ホモサピエンス）は、予測ができるのに予防はできない生物か？
我々は痛い目に遭わないと腰を上げない。

特別シンポジウム

低炭素社会へ

～ 世代を超える・つなぐ活動づくりのために ～

パネルディスカッション

コーディネーター　川北氏

パネリスト　湯谷氏

パネリスト　東氏

パネリスト　安井氏

パネリスト　井田氏

パネリスト　茅野氏

コーディネーター　川北氏

それでは、討論を始めましょう。5人のみなさんのご発表で共通していたのは、「交流が重要だ」ということでした。若い人が継続的に地域で活動するのは大変で、多少踏み込んで接しないと、お客さんになってしまう可能もあります。湯谷さん、東さんは、おばあちゃん・おじいちゃんたちとどう関わっていますか。

パネリスト　湯谷氏

We love 直島という NPO と連携していて、月に1回の定例会に参加し、いっしょに話し合い、協力してもらえるようにしています。特に、島の人が困っていることに係わろうとしています。観光ボランティアガイドが高齢化して不足しているので、私たちも観光ボランティアガイドに参加するようにして、島の方々との関わりを深くしている。

パネリスト　東氏

若い世代が地域に入ると、初めのうちは地域の方々は様子見をしている。我々は、田舎の人と接するには「ハード事業が重要だ」と実感している。新しい建物、道路が出来ると、先祖代々の土地がきれいになり、また生産できる場所になることを見せると、コロッと態度が変わる。目に見える形で成果を出し、そこから、どんどん提案をしている。我々のチームは、みんなiPad を持っていて、それを使っておじいちゃん・おばあちゃんにプレゼンをして合意形成をしている。

コーディネーター　川北氏

東さんは「ハードが重要」とのことですが、岡山県美作市での活動を、もう少し具体的にご紹介ください。

パネリスト　東氏

村の仕事は「出会い仕事」が多い。例えば皆で集まって、田んぼの水路の掃除、神社の草取りなどが行われる。高齢化により皆しんどくなっているので、都会の若い人を集めて一瞬で終わらせ、若い人が手伝っていることでコミュニティーが成り立っていることをお互いの関係性の中で見せていく努力をしている。

パネリスト　井田氏

地域のエネルギーに関わっていて、例えば小水力やバイオマスについての情報をインターネットでも調べることが出来るが、一番効果的なのは、お年寄りに話

を聞くことであり、iPad などを使って融合するのは、とてもいいことだと聞いていた。

コーディネーター　川北氏

地域で若者が「こんなことをしたい！」と言ったときに、それを受け入れてくれるコミュニティは、もともとイケているコミュニティですね。問題は、若者が全くいないわけではないのに、生かされていないこと。我々も地域にお手伝いに伺うときには、おじいちゃんたちの話を丁寧に聞くことで、本当はどこで困っているのかがわかります。みなさんはどんな工夫をしているのかを教えてください。

パネリスト　東氏

行政の看板を背負っていると、便利屋さんとして扱われることが多い。お使いに行ってくれとか、プライベートなことを頼まれることもあるが、それについては、はっきりノーと言っている。理不尽なことがあって、もきちんと否定するぐらいの気概を見せないと田舎では認められない。お年寄りは、コミュニケーションをしたいと思っており、仮想的な子どもとして扱われるのであれば、「ダメなものはダメ」と言える疑似的な家族の関係までいかないと地域に飛び込むのは難しいのではないか。

パネリスト　湯谷氏

一緒に活動している人たちは、60 代～ 70 代の方ですが、私たちは自然体で学生は学生として接している。もし、理不尽なことを頼まれたら、きちんと断わっている。自分の家族みたいな接し方をしている。

❖ ❖ ❖

コーディネーター　川北氏

今後の地域の活動の場面では、自然エネルギーなど、実業的な損得の場面に踏み込んでいく場合が多くなると思いますが、茅野さん、いかがでしょうか。

パネリスト　茅野氏

自然エネルギーを増やそうと活動しているグループがあるが、1 年半たってもまだ発電できないところが多い。聞いてみるとリーダーシップを発揮できるような環境になっていないらしい。無理に成果を上げようとすると独裁的な人がリーダーになってしまい、一時的な成果は出るが、長期の成果を出すことは難しい。環境問題は、興味がある人を相手にするので精一杯で、関心のない方に関心を持ってもらおうとすると、具体的なことが一歩も進まない。やはり順序として、関心のある方と手を繋ぐことからやっている。広く市民に伝える啓蒙的な活動は、ぜひ国がやってほしい。

コーディネーター　川北氏

安井さんのお話でおもしろかったのは、啓発だけではなく、具体的なアクションを引き出していらっしゃることでした。「わかっているけれど行動できていない」という人に対して、最後に一押しする工夫は何ですか？

パネリスト　安井氏

私達の活動は、高齢の方々にも取り組んでいただいている。私たちの仲間には、町内会で活動している方がいて、「うちエコごはん」のリーフレットを 100 冊持って、地域の高齢者の方々に話をしている。困っていることなど世間話の話の中で、エコな取組みのことも話題にするなど、一人一人と話をしている。ある町内会のリーダーが活動を始めると、隣の町内会でも環境に目覚めてくれる人が出てくる。地域のリーダーになる人に働きかけることは重要だと思う。

コーディネーター　川北氏

「地域にリーダーはいないか」と言うと、います。ただ、リーダーとボスとは違いますね。リーダーなら、自分たちにとって使えるものであれば、どんどん取り入れていくと思いますが、そんな地域のリーダーの方々と、どのように接していますか。

パネリスト　湯谷氏

他の方たちと接し方は変わらない。

パネリスト　東氏

集落には気難しい方もいますが、外から大学生などが来たら、意識的にその人のところに行ってもらっている。そこで、学生が引き出したネタをもらって、我々

が困ったときに、その方のところに相談に行くなど、相手を立てることをしている。リーダーシップは我々が持っているのかもしれないが、立てるときは立てて活動している。

コーディネーター　川北氏

では、地域で活動してもらうためのツボは？

パネリスト　茅野氏

自然エネルギーネットで中心的に活動している人は、ほとんど NPO の方で、企業側の人は一人います。NPO の人は 25 ～ 45 歳の人が多い。すぐに発電を始めたいとのことなので、県の枠組みを使って、その人たちを集めて事業に取り組んでいるのが実情です。

パネリスト　井田氏

デンマークのサムソ島、ロラン島では、一昔前、造船所の閉鎖とか、農業・漁業が立ち行かなくなり、若い人たちがいなくなるなど、町をどう再生していくかが課題であった。たまたま、コペンハーゲンの専門家から電話が来たところからエネルギー・環境の取組みは始まった。日本でも、風車を立てた茨城県羽崎の場合は、地元を良くしたいと思っていた人達がいた。北海道で風車をつくった鈴木さんは生協の人だった。エネルギー・環境を地域に広めたい時は、駄目になっていく地域を何とか良くしようとしている人を見つけ出すことが重要です。その人たちは、もやもやしている状態であり、そこに iPad など使ってアドバイスをするだけで動き出すのではないか。

コーディネーター　川北氏

安井さんのやってらっしゃることは、理にかなってますね。目の前のことであれば、小さなアクションで、自分で価値が実感できる機会をつくるといううまさ。このような工夫は、どういう経緯から生まれ、進化させようとしているのですか？

パネリスト　安井氏

気が付かないで行っていることもたくさんある。お年寄りは沢山知恵をもっていて、こちら側が教わることは多い。例えば、生ごみをチラシで作ったゴミ箱に入れておくと、調理が終わったときにはゴミの水分が飛んでいて、乾燥している。乾燥したごみは匂わないし、軽く、燃えやすいと話したら、そんなことはとっくにやっていると。このように昔からの知恵をどのように若い世代にお返ししていくかがテーマになる。

コーディネーター　川北氏

地域で動き出した人たちが、周りの人たちの力を借りて、地域で影響力を持っていくために、どうすればいいでしょうか。

パネリスト　東氏

棚田でタップダンスをしようと思っています。ニューヨークでタップダンスを踊っていた人が来て「棚田でタップダンスを踊ると楽しいね」と話が出た。タップダンス用の靴だと面白くないので、わらじを編んで、このワラジに缶をつぶしたもの、瓶のふたなどで音が出る仕掛けをして、靴のアタッチメントにする。ワラジを自分で編んで、伝統技術を学びながら、最終的にはタップダンスを踊ることを棚田のテラスで行おうと企画している。いまは、ワラジ編みのおじいちゃんを口説いているところです。

パネリスト　湯谷氏

今年の 1 月、子どもを対象としたイベントを行ったが、今度は、子どもだけではなく、親世代も参加出来るものにしていきたい。

パネリスト　安井氏

お母さんがやっているエコは、子ども達も一緒に出来るようになってきた。今度は、お父さん達がやっているエコ、会社でやっているエコ―例えば、休憩中に社内の不要な電気をけすなどの努力－子ども達に見せてあげることで、お父さんも会社で頑張っていることを見せたい。社会と子ども達を繋ぐことを、エコの観点から行いたい。さらに、家庭の中でのエコといっても、外食率が 30%以上になり限界がある。3 食中 1 食以上は外食の時代であり、外に出た時にエコなレスト

ランと、そうではないレストランのリストがあったなら、エコレストランを選べる、そんな紹介が出来たら、家の中でも、外でもエコを意識した活動ができるのではないか。

コーディネーター　川北氏

地域の活動を多世代に広げるには、リーダーにどのようにかかわってもらうのかが課題。ここまで前半の議論では、自分のやりたいことを言う前に、相手の困りごとを聞くことの重要性について指摘されました。私たちが言いたいことをプッシュする前に、相手の状況をブルする。引き出してから、それにのせて返していくことの大切さを感じました。

今後も低炭素化への取組みは、今ある手法を広げていくことも重要だが、新しい取を組みを拾い上げていくことも重要です。ある程度わかってくれている人に対して、実際の担い手になってもらうための工夫やヒントはありませんか。

パネリスト　茅野氏

的確な答えは出来ませんが、皆迷っているのが現状です。もう少し経験を積むとリーダーシップの取り方が分かるようになると思う。リーダーシップを取らなければならない立場にありながら、いじわるなおじさんが会員になったとき、うまくやれないんですね。どうするかは、原因が十人十色ですから、現場で修練を積むしかないのではないか。

パネリスト　井田氏

難しいですね。上級者が中心になるのはいいのですが、初心者の方々を拾い上げていくことも、同時に両方やらなければならない。重要なのは初心者をどう巻き込んでいくかであり、その時は難しい話ではなく、我々のくらしの中で、美味しいものが食べられ、暮らし易くなり、他の余得もないといけない。爪に火をともすような温暖化対策では、絶対に前には進まない。環境とか面倒くさいことは言わないで、他の余得を見せていくことで、初心者を巻き込めるのではないか。

また、サクセスストーリーが地域にあまりに少ない。デンマークの例だが、自分が風車をつけると、隣の人がもう少し大きな風車を建ててニヤリとする。すると、お隣はもっと大きな風車を立てるみたいな、いい循環が出来る。サクセスストーリーをつくることは難しく苦労も多いのですが、ぜひ、１個でいいから地域で見本になるサクセスストーリーをつくっていただきたい。そこを突破出来れば、かなりのことができる。上級者の方にはそこを分かってほしいし、初心者の方には噛み砕いて、余得があることを話ことが必要だと思います。海外の事例には、参考になるものが沢山あり、交流を進めることも必要です。

パネリスト　安井氏

追加の話をしたい。環境活動をしていて「ほめられることが少ない」ことが、もう一歩踏み出せないことに繋がっているのではないか。例えば、低炭素杯で表彰されたら「東京に行ってこんな賞をもらってきた、すごいでしょう」と話すと「なんで東京に行ってきたの」となり、実は環境問題でこんなことをやっていて表彰されたんだよ、など周りの人に話すことができ、話題が広がっていく。このように活動に誇りを持てるようにすること、その誇りが周りの人に伝播することがとても重要だと思う。

パネリスト　東氏

棚田でセグウエイのプロジェクトで、プリティッ

シュ・カウンシルの e-idea のアワードをいただいて、イギリスの国際機関に評価されたことが、地元ではすごく反応があった。そこから信頼が生まれて「すごいことをやっているんだ」との噂が村中に広がって行った経緯がある。海外や伊勢谷友介さんなどの芸能界などの権威を旨く使うのが重要だと思う。田舎のおじいちゃん・おばあちゃんも結構ミーハーなところがあるので、そこを旨く使うといいと思う。

コーディネーター　川北氏

活動している人は「誉めてほしい」と思っている人が多く、自分も誉める側に回らないといけないなぁと、最近つくづく思っています。

最近、私は町内会や自治会に呼ばれる機会がすごく増えています。その時に必ず出る質問は、「若い人をどのように巻き込むか」について。まず、若い人の都合をちゃんと考えること。次に、子どもの行事と連動させること、そして、料理の好きな女性は必ず活躍するので、その人たちを巻き込むことをお話ししています。

若い人が町内会に出続けない最大の理由は、町内会の会議は時間が長くて、結局何も決まらないから。また「任せる」と言いながら途中で文句を言ったり、「なんで俺の言う通りにしないのか」となる。「任せるなら任せる」「任せないなら任せない」のどっちかにしないと。実際に若い人の活用がうまい地域は、任せ方がうまい、つまり、リーダーのリスクの取り方がうまいんです。失敗もするかもしれないけれど、とりあえず任せることがリーダーとしては重要ではないでしょうか。私達のような外部の者が、「若い人の立場も考えてやりなよ」と言うと効果があります。

もうひとつは、地域の子どもたちのための活動と連動させること。お子さんを持つ地域の父母たちは忙しいので、地域の草刈り、道の清掃などは、今頃の季節（2月～3月）に、地域のスポーツ団体などの代表に集まってもらって、次年度の活動や行事の予定を聞き、忙しくない時期に、それぞれのスポーツのユニホームを着て集まってもらう。なぜそれが重要かと言うと、おじいちゃん・おばあちゃんにとっては、普通に子どもが集まっていると、だれそれの子どもですが、ユニホームを着ていると、地域の共有財、つまり自分たちの共通の孫になる。井田さんがおっしゃった「だれかの風車」ではなく、「私の風車」になるのと同じですね。孫が頑

張っているから、わしらも頑張らなくてはならないと。このことは、父母にとっても、メリットになり、子どもをとるか地域をとるかの、また裂きにならない。事前に調整が出来ているので、子どもを優先できるのです。

3つめは、日本海側でよく聞くお話しですが、太平洋側からお嫁に来た女性にとって、3世代同居率が高いために、地域の伝統料理は親（姑）が作ることが多い。ところが30~40歳代の母親になると、果たして自分の子どもが結婚した時に、その子どもに地域の伝統料理を食べさせることができるだろうか、と考える。島根県内のある集落では、「ごはんの時間」というプログラムがある。地域の姑世代の方から5人、地域料理の達人を選び、「煮物の作り方」教室を親子10組限定で募集したら、30組の応募があった、母親も学びたいと思っている。なぜ料理がいいかと言うと、料理は準備から片付けまでのプログラムのため、その間に、地域の先輩達と交流ができる。結果的に「あの人はこんなことができるとか」と、お互いがわかっていく。これら3つは、若者を地域に引きずり出す上で効果的です。

今の話を聞いていただいて、逆に若者から「こんなことにも気を配ってほしい」といったことは？

パネリスト　東氏

若者と言っても、いろいろ種類・事情があって、私は東京から地域に入っているのだが、定住することまでは考えていないのに、おまえは何十年も住むのだとプレッシャーがあると、ちょっときつい部分がある。地域から見るとこいつを手放したら、また集落の平均年齢が上がるなどの必死さは分かるが、あまり全面に出しすぎると、若者は引いてしまう。もうすこし余裕をもって接してほしい。

コーディネーター　川北氏

安井さん、相手のこんなことがわかると活動に引き出しやすいということはありますか。

パネリスト　安井氏

インターネット放送に大学生も来てくれているが、大学生の時は環境問題に係っていても、就職したら忙しくなり活動からはなれることがあり、女性は子どもが出来た時に、子育てが忙しく、環境活動を忘れていることが多い。時間がない時、新しい環境になっても、ほそぼそと続けていけることを認める度量の広さが必要ではないかと思う。例えば、赤ちゃんが来ることは大歓迎しますよ、面倒を見ますよとパパの感覚が必要ではないか。

コーディネーター　川北氏

今の話を伺って思い出したことがあります。福岡県内にある30歳代中心の会には、会をやめる規定、退会手続きがありません。その会には人事部があり、子どもの受験や親の介護などで会に参加できないときには、人事部に連絡して、活動が出来ない間は人事部付になります。休暇の間も、1年に1回面接がある。つまり、この会の会員は、そんなには増えないけれど、減らないのです。町内会では、「あいつは来ないからダメだ」となりますが、忙しい理由がわかれば、いろんな対処が可能になり、仕組み面でフォローができるといいなと思います。

今日はあまり議論になりませんでしたが、団体間の付き合い方についてもコメントをお願いしたいです。また、話し忘れていたことがあれば、ぜひお話しください。

パネリスト　茅野氏

団体間の交流はとても大事なことですね。一度に何十人も友達が出来るのですから。団体間の関係は、団体の長と私の予めのコミュニケーションに影響される。あの社長ならこの話をしても大丈夫かな、みたいなところに頭が向いて行ってしまいます。個人のつながりを突破口にして、団体としての繋がりはどうですか、となっていく。とにかく、アプローチとしては、やはり親密な個人の関係が土台になっている。

コーディネーター　川北氏

その関係がない場合、先輩に紹介してもらう、ということになるのでしょうか。紹介したくなる若者はどんな人ですか。

パネリスト　茅野氏

紋切り型にだれも付き合ったことのない人に、問題の中心の話を持っていく事はないですね。相手にとってプラスになる若者だったら紹介できる。

パネリスト　安井氏

ただ紹介してくださいと言っても、紹介しにくいと思うので「いまこんなことで困っているので知り合いいませんか」と聞くと、見つかることが多い。

リーダーを紹介してほしい時には、活動の内容や課題を具体的に話して、団体・地域のリーダーを巻き込むことにしている。参加して頂いていない方に声を掛けるときには、SNS の Twitter、Facebook を使って伝えたり、実際の場に出て来られないメンバーとはスカイプ会議をしたり、メーリングリストで報告しあうなど、いろんな手段を使ってアピールしている。冊子・メール・電話も使う。あらゆる手段を使って、できるだけ多くの人に参加してもらうことが大切。

コーディネーター　川北氏

困っていることを伝えるツボは？

パネリスト　安井氏

適材適所の人を見つけることが大切。特に地域の中で、リーダーシップをとれる人が良い。退職時に企業で高いポジションにいたとかいないとかは、あまり関係がなく、地域に入り込んでいる人を探した方が、伝わりやすい。子どもが小さいときは、意外に地域と関わることが多くあるので、地域と連携できるチャンスと思う必要があるのではないか。

コーディネーター　川北氏

自分たち自身が努力していて、「もう少しこういうのがあるといいね」というお願いの仕方がいいですね、「誰でもいいから」というのは、何も努力していない裏返しです。

パネリスト　安井氏

いろいろな形で声を広げ、伝手の伝手を逃さないで、こちらに持ってくるパワーが必要ですね。「ちょっと」でも頑張って一歩前に出ることが必要で、前に出ればだれかが助けてくれる。

パネリスト　湯谷氏

団体の交流では、直島プロジェクトでは、各大学と交流する機会がある。そこを深めて、様々な活動を報告しあって、交流したい。お互いのやっていることを活かしていけるような活動をしていきたい。地元の人・団体との交流では、Facebook をやっているが、そこで情報共有できればと思います。どう巻き込んでいくかの点では、地元の人とコラボレーションしてメニューを作る事が出来たらいいなと思います。積極的に地元の人と話をして、お互いの求めていることを実現できるといいなと思っています。

パネリスト　東氏

岡山県内でいろんな地域に入っていく時、行政・議員の紹介が考えられるが、それって筋が悪い。トップダウンで情報が降りてくるのは、縦の序列でおりてきて決まってくるので、すごく色々なしがらみまみれになるので、そのアプローチはしないようにしている。

逆に、我々がこの集落面白そうだと思ったときは、素性を隠して、その集落のイベントの一参加者として行き、農家に入って、キーパーソンみたいな人に近づき、話をし、Facebook などをしているのであれば、そこで繋がる。オフラインの付き合いでは、また伺いますと話して、その時はじめて、われわれはこんなことをしていますとアピールする形にして、地域間の交流・連携を深めている。

パネリスト　井田氏

団体間の交流については、自分では活動していないが、困っていることの共有は特に重要だと思います。変な言い方をすると、地域のコアとなる箱もの、集会場とかが重要ではないか。人が集まれる場が大事であり、café は非常にいいなと思った。そこで、ここは他にはない売り物だと言って、よその人たちを連れてこられるようにする。物理的な箱ものは、個人にも団体にも意外と重要ではないかと思っている。

言い忘れたことで、皆さんに考えていただきたいのは「お金で買えないものの価値」についてです。飯館村に取材に行くと、そのようなことが一杯あり、みんな駄目になってしまっている。県民所得は少ないのですが、すごく豊かなところで、山へ行けばキノコがとれ、

地下水はタダで、それぞれの土地に、今のお金の価値では計れないのだけれど、すばらしい売り物が必ずあるはずで、それを見つけていくのが重要だと思います。

そのとき、注目してほしいのは「地面」です。山林でもなんでもいいのですが、放棄された水田、放棄された塩田など使い道がない場所が日本中にいっぱいある。そこに太陽光パネルを置く計画があると、固定価格買い取り制度（FIT）が出来ているので、異業種交流なども始まり、土地の豊かさと土地の使い方をもう一度見直すことになる。ぜひ、「お金で買えない価値」について探してみることをお勧めしたい。

最後に地域のリーダーの資質として重要だと思うことは、地域のことを話しだしたら止まらない人は、どこの地域でもおり、そのような人が地域のいいリーダーになるのではないか、どんな集まりでも話をする、おじさん、おばさん、おじいさん、おばあさんを探すのが重要ではないかと考えます。

コーディネーター　川北氏

待っていても動かないことに対して、自発的に動いてもらえるようにするためにどうするかという時には、自分がしたいことを説明する前に、相手は何に困っているのか、をちゃんと捉まえて、相手はどういう動きやどういう仕組みになっているのかを理解して、そこにきちんとハマる提案をする、言葉がけをしていくことが重要ですね。

では、私たちはどうするか。

小規模分散型のエネルギーを導入しようとすると、日常の交わりの密度を上げていくことが大事だと思います。これからの地域づくりには、人の数の多さ（人口密度）ではなく、人の交わりの密度（人「交」密度）が大切です。人「交」密度が高い地域では、そこに住んでいる人たちの心の豊かさが違う。心の豊かさを基礎基盤とすれば、自分たちが建てた風車であれば、当事者として最も効果的に使うことになるでしょう。

最も大切なことは、相手の事情を理解した上で、提案したり、話し出したりすることですね。

みなさま、パネラーの方へ大きな拍手をお願いします。ありがとうございました。